

国立科学博物館による 「博物館ネットワークによる未来へのレガシー 継承・発信事業」の成果とこれから

独立行政法人国立科学博物館 小川達也
小竹沙祐里
濱村伸治
濱田浄人
小川義和

1. はじめに

平成28年度から平成30年度にかけて、国立科学博物館では文部科学省委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」（平成30年度途中から文化庁に変更）を通じて、各地域で巡回展や研修を行い、学芸員同士のつながりや学芸員の資質の向上に資する取り組みを行い、地域博物館同士のネットワークの構築を模索してきた。

本発表では、本事業の実施による成果や課題を明らかにし、地域文化の中心として博物館が社会に寄与するために、地域の博物館同士や他のステイクホルダーとの連携による、これからの博物館活動の拡充について考察する。

2. 「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」とは

1) 本事業のこれまでの活動

平成28年度から平成30年度の過去3年間にかけて、国立科学博物館では文部科学省委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」において、地域博物館同士のネットワークの構築について以下の三つを目的に実施してきた。

- ① 自館の財産を再確認できるよう、連携先の博物館の資料を活用した展示を企画すること
- ② 当該展示を地域内の他の博物館に巡回することで、地域内の博物館以外の教育機関等を含めたネットワークを活性化させること
- ③ 学芸員研修や学習プログラムをあわせて実施することで、巡回ミュージアム終了後にも連携館にノウハウ等のレガシーが残ること

3年間の委託事業を通じて、各地域で巡回展示や研修を行い、学芸員同士のつながりや学芸員の資質の向上に資する取り組みを行った。

【平成 28 年度】

●地域博物館ネットワーク活性化のための巡回事業を通じた地域連携の実践●

岩手県立博物館との連携を軸に、岩手県内の巡回事業を展開し、県内の博物館同士や博物館以外の団体との連携を深めることで地域博物館の活性化を図った。展示については、地域博物館が所有する重要な地層や化石など、地域資源を活用した巡回展示をおこなった。実施にあたっては、当該地域で中核となる博物館があること、当該地域をテーマにした展示を直近で検討していることなどから、岩手県立博物館との連携を軸として、展示テーマ



とあった展開が可能な県内の博物館等との事業連携を行った。

岩手県立博物館をはじめとして、岩泉町民会館、大船渡市立博物館、久慈琥珀博物館の4か所を巡回した。また、巡回期間中のイベントについても、当館のもっているノウハウを共有し、この実施の支援を行った。

●地域博物館で実施できる学芸員研修プログラムの開発・試行●

地域博物館が持続的に活動していくためには、その博物館で活動する博物館関係者の資質向上やネットワークの活性化など、博物館で活動する関係者を元気にすることが不可欠であると考えられる。博物館関係者の資質向上のための手段としては博物館研修などが挙げられるが、地理的な要因や館の規模などから、首都圏での研修等には、なかなか参加する機会が少ない関係者も多い。こういった背景を受けて、研修参加の機会の少なかった地



域博物館学芸員やボランティア等、地域資源を活用したプログラムに携わる人材に対する研修を開発し、地域博物館を会場に試行的に実施した。

帯広百年記念館では、通常の展示を新たな「見方」で再認識をするために、アルバムディクショナリーを用いた研修を行った。沖縄県立博物館・美術館では、県内の様々な博物館・教育施設・研究機関で行われている学習プログラムの点検を行う研修を実施した。

このほか、博物館同士の有効な連携体制を検討するために国内外の博物館に関する事例調査を行った。

【平成 29 年度】

●同一地域の博物館等連携モデルの構築 —巡回ミュージアム in 沖縄—●

同一地域内連携のモデル構築を目指し、沖縄県内の各博物館等と連携した。国立科学博物館で行ってきた「琉球の植物」に関する研究の成果を基に、県内博物館が所有する植物由来の民具等の人文科学系資料との融合を意識し、地域特有の自然とそれにより醸成された地域文化をリンクさせた情報発信をおこなった。展示以外では研修事業として、博物館の魅力を学芸員等職員が再認識するための研修と、標本作成に関する研修を実施した。また、観光客の多い沖縄で、博物館の魅力をいかに発信していくかを考えるため、ホテルを会場にした博物館外でのアウトリーチ展示の試行的展開や、観光業界関係者と博物館関係者を交えた勉強会を実施した。



また、観光客の多い沖縄で、博物館の魅力をいかに発信していくかを考えるため、ホテルを会場にした博物館外でのアウトリーチ展示の試行的展開や、観光業界関係者と博物館関係者を交えた勉強会を実施した。

この展示の巡回は、熱帯ドリームセンター、沖縄県立博物館・美術館、名護博物館、宜野湾市立博物館、沖縄市立郷土博物館、ちやたんニライセンターにて行った。

●広域の博物館等連携モデルの構築 —巡回ミュージアム in 長野・in サヒメル—●

広域の博物館連携のモデルケースとして、長野市立博物館および島根県立三瓶自然館と連携し、「恐竜」というテーマで展示を行った。それぞれの展示を実施するにあたり、報道機関と密に連携を取ることで、地元への発信を意識した。また、学芸員および博物館ボランティアを対象とした研修プログラムや、観光に対する博物館の在り方について議論するシンポジウムを長野にて開催した。地域事例の紹介のために島根県立三瓶自然館の代表者が講演とともに意見交換を行い、地理的に離れた2館が情報共有できる機会を作ること



もその狙いとしたものであった。

これらの事業において、長野市立博物館と島根県立三瓶自然館の学芸員や職員が相互に交流する機会を設けることで、広域の博物館同士が各館の現状について情報共有し、今後の魅力向上に向けて連携するための基盤づくりを行った。

【平成 30 年度】

●博物館関係者同士の出会いと学び●

北海道内での研修事業を検討するにあたり、道内の博物館関係者に研修についての意識調査を行った。意識調査を踏まえ博物館関係者向け研修事業 8 件、巡回展示・イベントを 4 件実施した。

事業形態	テーマ	場所
研修	資料の取扱と修復について	美幌博物館
	展示発見カードをつくろう！	豊浦町旧礼文華中学校
	樹脂封入標本の製作と活用にかかる研修	士別市立博物館
	樹脂を使った標本作成ワークショップ	美幌博物館
	科学館的ミュージアム・マネジメント (事業点検編)	札幌市青少年科学館
	博物館施設における多言語化	江差町保護センター
	博物館の展示制作について考えよう	釧路市立博物館
巡回展示	「生命のれきし —君につながるものがたり—」	北海道博物館
		北網圏北見文化センター
イベント	えほん meets 博物館	三笠市立博物館
		滝川市美術自然史館

●他業種の出会いと学び シンポジウム

「地域の情報発信拠点としての博物館—観光と博物館の連携をさぐる—」●

近年、外国人観光客の増加、観光のスタイルの変化に対し、観光による地域活性化などの取り組みが増加しつつある。その中で、歴史、暮らし、自然、芸術など、地域資源にかかる「もの」と「情報」を集約、発信している博物館への期待は大きい。地域資源の情報の集積・発信拠点である博物館が、どのように「観光」と連携してゆくべきかというのは、



喫緊の課題のひとつである。本シンポジウムでは、博物館、観光業界などそれぞれの立場からの意見を共有し、相互に対する理解を深めることで、互いの強みを活かし、観光客、利用者、地域住民にとって意味のある望ましい連携の在り方について議論する契機となることを目的とした。

・事業実施内容の共有

平成30年度のレガシー事業については、映像と報告書という形での共有を図った。映像については、研修を記録したものを北海道博物館協会が管理をし、協会加盟している道内の博物館が視聴することができるようになっている。また報告書については、印刷した冊子として過年度のレガシー事業実施地域へ配布したほか、当館のホームページでも閲覧ができるようになっている。

2) 本事業に関する今年度の活動

本事業に関する各年度の成果に関する詳細は、国立科学博物館のホームページ上に報告書の掲載を行っているので、そちらを参照いただきたいⁱ。

また、2020年1月26日には国立科学博物館において、これまでのレガシー事業の総括を目的としたシンポジウムを開催した（このシンポジウムの成果については、大会当日に共有を行う）。またシンポジウム当日の様子については、記録映像をホームページ上に掲載する予定である。

3. 「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」の成果と博物館の社会的役割

1) 事業の成果として

これまでの事業の実施を通じて、実施館や関連機関からの様々な報告が寄せられている博物館の有する様々な資源、人材、ノウハウ、ネットワークを共有し、継承することの重要性を認識できたことが各地域での大きな成果といえる。事業の年度としては各地域単年度ではあったが、本事業の成果が他館との継続的な事業実施や、新しい館とのつながりの構築につながっていることも報告されている。

今後、事業での得られたことを長いスパンで継承するためには、展示資料とともに学芸員研修を通じた展示・教育・資料保存などのノウハウの習得も重要となってくるだろう。また、こうした基盤を支えるものとして、学芸員の学びの連鎖を継承できる環境やコミュニティーが構築されていることが不可欠である。その点で、地域の博物館協会との連携など、地域博物館との「点としての連携」から「面としての連携協働」に発展していくことが効果的であろう。

2) これからの社会における博物館の在り方とは

2019年9月に開催された第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会2019においては、博物館の定義の改正が話題に挙げたことは記憶に新しいⁱⁱ。また、定義に関連して、持続可能性に関する言及や社会課題に関するテーマや発表が多く行われたことも印象的であっ

た。この ICOM 京都大会 2019 に限らず、日本国内はもとより、世界のいたるところで様々な課題が林立していることは自明の通りであり、こうした課題解決に対し、どのように博物館が寄与するかという点も、これからの博物館の在り方を考える上で重要な論点となるだろう。

今回の全科協第 27 回研究発表大会におけるテーマは、そうした社会的な役割を検討することが主眼となっており、具体例として 2015 年に国連で採択された SDGs（持続可能な開発目標）が挙げられている。

SDGs を改めて紐解けば、2001 年に策定されたミレニアム開発目標の後継として、2012 年のブラジルでの「持続可能な開発会議（リオ+20）」の成果文書を経て、2015 年 9 月の国連サミットで採択されたものである。持続可能な世界を実現するための 17 のゴール（目標）・169 のターゲットから構成されているⁱⁱⁱが、このゴールやターゲットを一つ一つ見れば、様々な形で博物館が寄与する箇所を見つけることができる。例えば、科学系博物館だけに焦点をあてても、情報への平等なアクセス機会の創出や災害に関する共有やその対策、地球規模での食糧問題への理解から地域での対応、健康的な生活を送るための情報の提供や運動の実践、生涯学習の機会の促進、文化的背景のあるジェンダー不平等の解消、生態系の保護・保全や回復、持続可能なエネルギーについての理解増進、地域における雇用の創出、途上国や国際理解および不平等の解消、自然や気候変動の影響、水産資源の活用…などなど、切り口は無数に存在するといえる。

もちろん、博物館のミッションとの兼ね合いも考慮する必要があるが、直接的な関係がない事柄においても、地域の独自性や地域の政策等の関連によっては、博物館が取り組む必要のある分野も存在するであろう。

持続可能性に限らず、社会的課題についての取り組みが必要となる場合に、単独の館ではテーマとしても、またマンパワーとしても対応できないことも想定されうる。こういったことが地域において必要かという観点とともに、その実施に向けては、連携協働による博物館機能の拡大が重要となるであろう。レガシー事業の実施においても、他機関との連携によって初めて手を伸ばすことができた来場者やテーマがあった。

これからの博物館は、地域の社会的課題にも対応し、「施設としての博物館の範囲を広げ、取り巻く自然環境と社会環境を含めた文化空間^{iv}」で展開される博物館機能を充実させることも必要になってくる。このとき、従来の専門的な学芸員の能力に併せて、コミュニケーションをすることやコーディネートをする能力が大切となるであろう。

これまでのレガシー事業においては、そうした社会的な課題を主眼にはおいていなかった点も踏まえ、課題を知る機会、他館での事例を共有する機会、能力の伸長に寄与する研修を実施できることが、これからの博物館の在り方を考える上での課題であるといえる。

i 国立科学博物館ホームページ「地域博物館との連携協働事業」紹介ページ

<https://www.kahaku.go.jp/renkei/traveling/index.html>（2020 年 1 月 20 日参照）

※ 2020年4月以降のホームページの改修により、ページリンクの変更可能性あり。

- ii 第25回 ICOM 京都大会 2019 のプログラム等については下記のリンクから。
<https://icom-kyoto-2019.org/jp/>
また、博物館定義の見直しに関する内容は公益財団法人日本博物館協会の News バックナンバー（2019.4.22）を参照。
https://www.j-muse.or.jp/06others/news_backnumber.php
- iii 外務省ホームページ「JAPAN SDGs Action Platform」ページ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>（2020年1月20日参照）
- iv 小川義和、『協働する博物館 博学連携の充実に向けて』、p.346、ジダイ社、2019年。

